

岡 君 の 思 い 出

柳 沼 重 剛

私が助手として西洋古典研究室のお世話になることになったとき、松平先生から、近ごろは教室がだいふにぎやかになって、大学院にはとてもよくできる学生もいるのだと伺った。それが岡君だった。当時松平先生は、あれはたしかヴィラモヴィッツがどこかでそれを薦めているというのでだったと思うが、正規の授業とは別に、週に一回ヘロドトスとリウイウスを速読する会を研究室でやっておられた。岡君がたいへん出来る人だと私が実感したのは、まずその会でだった。すらすらよく読めるだけでなく、読みながら彼が時々、たいていは控えめに、芝居の傍白のような口調で入れる半畳—「これおもしろい言い方ですね」とか、「なんやけったいやな」とか言うくだりは、本当におもしろい言い回しだったり、「こんなこと言って」と思うような箇所だったりした。つまり言葉に対する感受性がみずみずしかったということ、一口で言えば、本当の意味で語学力がすぐれているということだった。

岡君の語学力は桁外れと言ってもいいものだということが段々に分かってきた。ギリシア語・ラテン語をすらすら読むとか、英・独・仏語をよくこなすとかだけなら、ほかにもそういう人はいそうだが、彼の場合は、ホメロスとの関連でヒッタイト語の勉強を始めたかと思うと、やがてはさらに戦線を拡大してサンスクリット、それからさらにシュメール語にまで分け入って行った。しかもはたで見ていると、勉強してますやってますという素振りがまったくなく、むしろひたすら楽しんでいる風情なので、ある時、そんなに次々にいろんな言語をやって、混乱したり苦勞したりすることはないのかと尋ねたら、未知の言語の勉強で苦痛を感じたことは一度もないと彼は言った。—こういう彼があげた最大の成果が、1958年、関西学院大学での学会の第九回大会で発表され、『西洋古典学研究』Ⅶに収録された論文、「英雄伝説として見たヘーラクレースの ἄθλοι の問題」である。岡君自身、これが若き日の最大の思い出になっていたのではないかと思う。

学会の一月足らず前に、彼が私に大型の角封筒を差し出して、「これをしばらく預かっていただけませんか」と言った。「これ研究発表の原稿なんです

が、手元においておくと、毎日引っ張り出しては書き直さないと落ち着かないんです」。「預かってもいいけど、学会までまだ日はあるんだし、直したきゃあ気のすむまで直したらいいじゃないの」。「いやあだめです。こんなに直していたら、学会の日になってもまだ原稿が出来てないなんていうことになりかねないんで。ですから、この部屋（松平研究室）の鍵のかかる引き出しに入れといてください」。「心得た。—けど、明日になったら、あの鍵開けてくれって言いに来ないかしら」。「絶対来ません」。本当に彼は来なかった。この論文は、ヘラクレスの冒険伝説の原型を、ギルガメッシュ叙事詩との比較研究によって推定しようというもの—ヘラクレスは冒険を重ねて名誉を得るばかりでなく、さらにその先に、不死を求めていたはずだ、というものだった。

当日、岡君の発表の直前に、オリエント学会のS先生という大物の先生が会場に来られた。オリエント学会も関西で開かれたのか、それとも何かほかの所用でお見えだったのかは知らないが、とにかく岡君の発表がギルガメッシュを踏まえたものだということをどこかでお聞きになって、それでお見えになったのだと思う。また、隣接学会の先生なので、例えば高津先生などは面識もおありだったようだが、まだ学生の岡君は、その方がそんな偉い先生だとはつゆ知らず、非常に説得的な発表を進めていった。ところが、発表が終わるやいなや、S先生は質問をなさった。ある研究書の名をあげて、「あなたはたいへんおもしろい大胆なことをおっしゃったが、しかし今の発表を通じて、この基本的な本にまったく触れられていないのはなぜか」という趣旨だった。これに対して岡君の答えは単純明快に、「ああ、あれはもう古いので、だれも問題にしません」。それを聞いてS先生がどういう表情をなさったか、会場のいちばん後ろにいた私にはうかがい知ることはできなかったし、S先生ご自身反論もなさなかった。

「岡君言ったね」と松平先生がおっしゃった。「Sさんにはいい薬になったろう」とも苦笑まじりにおっしゃった。「あれはS先生だったってことを、岡君に伝えるぐらいは伝えておきましょうか」と伺うと、「そうやね」とのご返事だったので、私から岡君に、彼があっさり一蹴した相手は、実はS先生だったのだと漏らした。すると彼は「えっ」と言って顔色を変え、「あれSさんだったんですか」と言ったなりしばらく絶句して、それから大きくため息をついて、「えらいことしてしもうた。Sさん怒ってはるやろうなあ。ああ、失敗した。松平先生にもご迷惑かけてしもうた。どうしよう。…、…」松平

先生は、いい薬になったろう言うてはったよ、と言ったぐらいではおさまらず、それから関学の中を歩き回り、外へ出て町を歩き回り、コーヒー屋に入り、ビールを飲んでまた歩いて、その間ずっと岡君は「ああ、失敗した。えらいこととしてしもうた」を繰り返していた。

そうまで気にしなくてもいいではないかと、私なんか思ってしまうが、岡君はそうは行かなかった。どういう事情であれ、人を傷つけるのを極度に恐れていたように思う。彼が亡くなったあとで、松平先生が「岡君ていうのは、決して人の悪口を言わん男やったね」とおっしゃったのが忘れられない。さっき、控えめに半畳を入れたと言ったが、あれもこれとつながっていると思う。結構づけづけ言うこともあるのだが、そんなとき、いつもかすかにはにかんでいた。やはり学生のころ、飲み過ぎた翌朝学校へ来ては、「ああ、胃の調子がわるい」と愚痴る事がよくあったが、そんなときでさえ彼は同じにはにかみを見せた。

はにかむどころか、一步も後へ引かずに相手とわたり合うこともあった。それは、自分が研究を重ねて得た解釈についてである。若いころでは、藤縄さんとの間に行われた、ホメロスにおける馬の使い方や、ホメロスを支えていた聞き手の問題についての論争、近くは藤澤さんとのオイディプス論争などにそれが見られる。だからS先生の一件にしても、「あれはもう古いから問題にしないでいい」という考えを訂正するつもりは彼にはない。ただ、駆け出しの研究者がS先生ほどの大家にものを言うときには、それなりの言い方があったろうということ、人一倍気にしたのである。それだけ性善良にして心が温かったと言った方がいっそう適切かもしれない。

その心の温かな岡君が、私が殺される探偵小説を構想していたこともある。なぜ私が殺されるのかというと、松平研究室に非常に貴重なギリシアの壺か何かが所蔵されていて、それをめぐって事件が起こるからなのだ。これは松平先生がおもちで、当時ペンギン・ブックで出たばかりのKatharine Farrerという作家のCretan Counterfeitという探偵小説—ここで殺されるのは、名前はもちろん変えてあるが、まちがいなくSir Arthur Evansである—を彼が読んだこと（これはペンギンとしてはかなり部厚な方だったが、彼の読み方の速かったこと）と、それと前後して銀閣寺門前の橋本關雪邸で、ギリシアの壺のコレクションを見せてもらったことがきっかけになっていたのだと思う。一見犯人くさいが実は違うというのにはあの古本屋のおやじがいいということころまではあ

っさり決まった。一見犯人とは思えないが実はそうだという人物については、松平先生も知恵を出してくださって、「あのカレーライス屋のおやじなんていうのは適任だぜ」などとおっしゃったが、その人物をいかにして西洋古典研究室や私と結びつけるか、つまり、そのカレーライス屋がどうしてギリシアの壺の存在を知り、どうして私を殺してまでもそれを盗み出すほどに関心をもつことにさせるか、それを緻密に考案するほどの暇に恵まれなかったので、結局その小説は書かずじまいになった。それが残念だとまでは言わないことにしておく。岡君は私にどういう殺され方をさせるつもりだったのかも、わからずじまいになってしまったからである。